

Peter Adamson
Al-Kindī

Oxford, New York: Oxford University Press, 2007, pp. xiv + 272

小 村 優 太

本書は「最初のアラブ人哲学者」とも呼ばれる、アブー・ユースフ・ヤアクーブ・キンディー Abū Yūsuf Ya'qūb al-Kindī (870 以降歿) の哲学思想に関する研究書である。著者の Adamson は 2005 年に出版された *Cambridge Companion to the Arabic Philosophy* の編者を務め、同書におけるキンディーの項目を執筆しており (pp. 32-51), 2012 年には Peter E. Pormann と共にキンディーの哲学著作集の英訳を出版している (*The Philosophical Works of al-Kindī*, Oxford: Oxford University Press, 2012)。Adamson は前書きで、本書をこの哲学著作集英訳の必携書として書いたと述べている (本書出版時には未出版)。キンディーに関する研究書は、Jolivet が 1971 年に出版した、キンディー『知性論』*Risālah fī al-'aql* の仏訳と詳細な註釈や (Jean Jolivet, *L'intellect selon Kindī*, Leiden: E. J. Brill, 1971), Ivry が 1974 年に出版した、キンディーの主著『第一哲学』*Fī al-falsafah al-ūlā* の註釈付き英訳と解説本 (Alfred L. Ivry, *Al-Kindī's Metaphysics*, Albany: State University of New York Press, 1974) が存在するが、全体としては発展途上の分野だと言える。なぜなら、キンディーの著作はその大部分が散逸したと長い間考えられており、20 世紀になるまで、キンディーの思想は中世ラテン語翻訳を通じてしか触れることが出来なかったからである。しかし 20 世紀になりイスタンブールでキンディーの諸書を取めたアラビア語写本 (Aya Sofia 4832) が発見され、1950 年と 53 年に Abū Rīda による校訂本が出版されたことにより、状況は一変した。よって最初のアラブ人哲学者キンディーの研究は、もっとも若い研究分野として 20 世紀後半に再び研究の表舞台に登場してきたのである。その点でも、キンディーに関する包括的入門とも言える本書が一般に入手しやすい形で出版された意義は大きい。

本書は全部で 8 章構成になっており、第 1 章は「人生、作品、影響」、第 2 章

は「ファルサファ」、第3章は「形而上学」、第4章は「永遠性」、第5章は「魂論」、第6章は「倫理学」、第7章は「科学」、第8章は「天」についてである。

キンディーがアラブ人であると強調されるのには理由がある。実はイスラーム哲学を担った人物の多くは非アラブ系のペルシア人やトルコ人であり、生粋のアラブ人はむしろ少数派だった。その点キンディーはアラビア半島の名門キンダ族出身であり、血統的にも純粋なアラブ人だった。彼はアッバース朝のカリフ、マアムーン al-Ma'mūn (在位 813-833)、ムウタシム al-Mu'taṣim (在位 833-842)、ムタワッキル al-Mutawakkil (在位 847-861) に仕えた。彼の生歿年はよく分かっていないが、彼の著作が 866 年に起きた叛乱を記しているため、歿年はそれからしばらく後、一般的には 870 年のやや後と考えられている。また彼が 860 年代に存命であり、830 年頃すでにカリフに仕える年齢だったとすれば、だいたい 800 年頃の生まれと考えられる。晩年は同じくアッバース朝に仕えた科学者のバヌー・ムーサー Banū Mūsā 兄弟との政争により立場が弱くなったと伝えられている。更に彼はカリフ、マンスール al-Manṣūr (在位 754-775) 以来の翻訳運動というアッバース朝の国是を推し進め、彼の指揮下で様々なギリシア語の著作がアラビア語に翻訳されたという。イブン・アルナディーム Ibn al-Nadīm (995/998 歿) が書いた『目録の書』*Kitāb al-Fihrist* によると、キンディーの著作は 300 ほどを数え、その分野は狭義の哲学のみならず、科学、光学、薬学、数学など多岐に亘っていた。つまり彼はカリフに仕える政治家であり、翻訳運動の指揮を執っており、自身も数百の著作を残した万能型人物であったと言える。

また彼は哲学 (falsafah: ギリシア語 φιλοσοφία の音写) と宗教の融和を志向していた。彼は『第一哲学』の序文で、宗教を理解する助けとして哲学がいかに有用であるかを力説する。彼にとって宗教と哲学は決して矛盾するものでなく、相互補完的なものであったようだが、宗教 (= イスラーム的、アラブ的な土着の知恵) と哲学 (= ギリシアに代表される外来の知識) との対立はその後のイスラーム世界における哲学者たちの重要な課題として残される。

彼が読むことの出来た哲学著作がどの程度のものであったかということは、ほとんど分かっていない。これは、彼と同時代人の翻訳家フナイン・イブン・イサーク Ḥunayn ibn Ishāq (809-873) の訳書をどの程度読むことが出来たのかによって変わってくる。おそらく『ティマイオス』*Tίμαιος* や『パイドン』*Φαίδων* のようなプラトン Πλάτων (BC427-347) の著作の要約を読むことは出来ただろう

が、彼の知識の中心はアリストテレス Ἀριστοτέλης (BC384-322) であった。

しかしキンディーが知ることの出来た「哲学」像は、現代の読者とかなり異なっていた。キンディー主導の下でプロティノス Πλωτίνος (204/5-270) 『エンネアデス』 Ἐννεάδες の後半部分の要約『アリストテレスの神学』 Uthūlūjiyā arisṭātālīs や、プロクロス Πρόκλος ὁ Διάδοχος (412-485) 『神学綱要』 Στοιχείωσις Θεολογική の再編集版『純粹善について』 *Kitāb fī al-khayr al-mahḍ* がアリストテレスの作品として書かれた（とはいえキンディーの著作『アリストテレスの著作の量』 *Kammīyyah kutub arisṭūtālīs* に両書は挙げられていない）。またアリストテレスの論理学はいまだ部分的にしか翻訳されておらず（とりわけ『分析論後書』 Ἀναλυτικὰ Ὑστερα が訳されるにはしばらく時間がかかる）、そのためキンディーは論理学でなくエウクレイデス Εὐκλείδης（前3世紀頃）の数学を基礎として議論を組み立てた。彼の数学モデルへの偏愛は、このような資料的制約が原因だと考えられる。

本稿では紙幅の問題もあるので、とりわけ第5章、キンディーの魂論の記述を見てみることにしよう。キンディーがアリストテレスの『魂について』 Περὶ Ψυχῆς を読めたのかというのは大きな問題だが、どうやらある時期以降、おそらくイブン・ビトリーク Ibn al-Biṭrīq (800 頃歿) による折衷主義的な敷衍を読むことが出来たと考えられている。キンディーが残した魂論にかんする著作は『魂にかんする論考』 *al-Qawl fī al-nafs*, 『非物体的実体が存在するという事』 *Anna-hu [tūjad] jawāhir lā ajsām*, 『魂にかんする断片』 *Kalām li-l-Kindī fī al-nafs mukhtaṣar wajīz* の三作、知性については『知性論』、そして記憶や表象については『想起について』 (Abū Rīda 版未収録) と『睡眠と夢の本質について』 *Fī māhiyyah al-nawm wa-l-ru'yā* という作品がある。また第一部のみが現存する彼の主著『第一哲学について』の様々な箇所にも魂についての言及がある。魂論において、キンディーの第一の問題は、魂と肉体の関係性、いわゆる心身問題だった。『非物体的実体』ではアリストテレス『カテゴリー論』 *Κατηγορίαι* に依拠しながら、魂が非物体的な実体であることが論じられる。一方で『論考』では、アリストテレスとプラトンの学説の究極的な同一性が熱心に論じられながら、魂が天上の物体の影響を受けながら地上的物質のうちで活動を行うことが説明される。キンディーの魂論的著作の問題は、それらが相互に矛盾しているように思わ

れる点だが、それであっても共通するひとつの概念が存在する。それは「魂は純一で非物体的な実体である」ということである。この点にかんして、アリストテレス『魂論』と内容を摺りあわせようという努力はほとんど見出されないと Adamson は言う。知性論においても、四つの知性を設定したのはキンディーが最初である。Adamson によればそれは、人間の外部にある (1) 第一知性、人間的な知性の様態である (2) 可能的知性, (3) 性向的 (獲得的) 知性, (4) 現実的知性の四つである。キンディーの知性論がフィロポノス *Ἰωάννης ὁ Φιλόπωνος* (490 頃-570 頃) の影響を強く受けていることは既に Jolivet によって指摘されていたが、Adamson もここで概ねその線を継承している。但し、彼はフィロポノス自身でなく、より後代の要約的な資料に影響を受けているのではないかと予想している。キンディーが生きた時代の翻訳状況に鑑みれば、Adamson のこの解釈は説得力があるように思われる。(フィロポノスのアラビア語訳は現在ほぼ散逸している。) また『知性論』で展開されるように知性的認識と感覚的認識を並行的に捉える認識論において、両者は結局まったく交差しない別個の独立した認識構造に過ぎないのではないかという疑問が生じる。Adamson はこれを「認識論的隔たり (Epistemic Gap)」と呼ぶ。もし両者がまったく関係ないのであれば、知性的認識を上位に置くキンディーにとって、感覚的認識は何の役にも立たない邪魔者に過ぎないのではないか。魂や知性の身体からの根本的な離存性と優越性を主張するキンディーの魂論において、この問題はきわめて重要である。そしてこれは、キンディーが「経験主義」にどのような態度を取っていたのかということでもある。Adamson はキンディーの立場が新プラトン主義的形而上学者から数学的志向を持った「科学的」研究者に移り変わっていったのではないかと指摘するが、それでも彼の「経験主義者」としての側面は極めて小さいと言う。第 5 章の最後には表象力と預言的夢が論じられる。基本的に第 5 章のテーマは魂と身体、感覚的認識と知性的認識のように、相互に強く対立し合うものだったが、表象力は言わばその対立構造の中間にある存在と言えるだろう。キンディー自身の哲学において内的感覚論はそれほど発達せず、表象力に関する問題はどちらかという未整理のまま残されてしまっている。

本書を通読して感じるのは、キンディーが論じた題材の幅広さである。古代から中世にかけての哲学者は概して科学者としての側面も強く持っているが、とり

わけ中世イスラーム地域の哲学者にはその傾向性が強い。そういったイスラーム的哲学の劈頭を飾る人物として、キンディーほど相応しい人物はいないだろう。先ほどキンディーには300以上の著作があったと書いたが、そのほとんどは risālah, つまり書簡形式の論考であり、一篇ごとの分量はそれほど多くない。代表的な『知性論』も校訂テキストに直して3ページほどである。それ故、何巻にも及ぶ大作において展開される、首尾一貫した哲学体系をキンディーに望むことは出来ない。しかし、公務に勤しみながら、仕事の合間を縫って書簡形式の短い論考を書き続けた彼の姿に、私は言われようのない親しみを感じるのである。